格差社会化に直面する若者たちの社会心理構造

土井隆義　筑波大学大学院教授

1――格差社会の進行と若者たちの心性

（1）フリーターやニートの急激な増加

我が国の若年層の失業率は、1990年代の半ばから急速に高まっている。15～24歳の男子の失業率は、2005年も10%に近い状態である。また、いわゆるフリーターやニートの増加も社会問題となっている。現在、フリーターは201万人、ニートは64万人いるといわれている。

このような状況のなかで、定職を持つ若者と持たない若者との格差が広がりつつある。現在、我が国の総就業者数のうち非正社員は約32%を占めている。かつてマルクスが、資本主義体制における景気の調節弁になっていると喝破した雇用の不安定な単純労働者は、今日ではフリーターの人びとのなかに多く見出される。いまや階級の対立軸は、かつての資本家と労働者の間から、正社員と非正社員の間へと移行したかのようである。

もとより、その主たる原因は、長引く景気低迷下で多くの企業が社員採用を絞ってきた点にある。その意味では、我が国の経済構造に起因する側面が強い問題だといえる。にもかかわらず、昨今は、このような格差化の傾向が、若者たちの「働く意欲の低下」といった心性の変化や、「未熟な対人能力」といった能力の低下に起因したものとして語られることが多い。マスメディアで流布されるフリーターやニートに関する言説に、否定的な色彩を帯びているものが圧倒的に多いという事実が、まさにそれを物語っている。

近年の若者たちのメンタリティに、ある特徴的な傾向が見出されるのは、たしかに一面における事実ではあろう。生まれもった「自分らしさ」に対する過剰な思い入れと、それに起因する宿命主義的な人生観が、彼らの間に浸透しつつある。2006年に高校生新聞が行なった調査では、人生でもっとも大切にしたいのは、「好きなことに打ち込む」ことだと回答した高校生が24%であるのに対して、「やりがいのある仕事をする」ことだと回答した高校生は21%にすぎない。そして皮肉にも、その傾向が、彼らの人生に対する自信過剰とともに、その自信喪失をも

招いてしまっている側面もあるように見受けられる。

しかし、第一義的には我が国の経済構造に起因する問題として語られるべきものが、主たる原因があたかも「若者の心」にあるかのように扱われる傾向が見られるのは、グローバル化する世界経済のなかで、我が国においてもエコノミーの原則が最優先されるようになっているからである。その文化状況のなかで、市場主義的なコミュニケーション能力のみを人間の尺度とみなすような、いわば虚偽意識（客観的事実を基盤として持たない意識）が急速に広まっているからである。

上述の高校生新聞による調査では、「お金があればたいていの望みはかなう」と回答した高校生が44％もいる。皮肉なことながら、昨今の若者たちに浸透しつつある宿命主義的な人生観は、その帰結の一つであろう。そして、そのようなメンタリティの傾向が、問題の所在のすり替えを可能ならしめていると考えられるのである。

（2）生得的属性に対する強い思い入れ

荷宮和子は、「がんばらずに良い結果を出すほうがかっこいい」、「何も考えずに行動するほうがかっこいい」、「挫折しかけた道でさらに努力を続けるのは見苦しい」が、昨今の若者たちの基本的な価値観だと指摘する[1]。この３つの価値観の背後に共通してあるのは、「生まれもった素質によって人生はほとんど決まってしまう」という発想であろう。だから、がんばって良い結果を出しても、所詮それは本物ではないと思えてしまうし、あれこれと考えて行動しても、結局はなるようにしかならないと思えてしまう。また、粘り強く努力している人をみると、素質もないのに何を勘違いしているのだろうと思えてしまうのではなかろうか。

生まれた身分ではなく素質というところは現代風であるが、これではまるで封建時代への逆行であろう。考えてみれば、生得的属性のくびきから人びとを解放し、獲得的属性によって人生を選択できる世界にしようというのが、これまで私たちの目指してきた近代のスローガンだったはずである。自由にせよ、平等にせよ、それを実現するための理念であった。ところが、いまや若者たちの間には、獲得的属性よりも生得的属性にウエイトを置いた宿命主義的な人生観が浸透しつつある。大袈裟にいえば、これまでの近代的なベクトルが逆流しはじめているのである。

苅谷剛彦による高校生の調査では、1979年には自己能力感の高い生徒ほど、高い学歴を求めて学習時間も長い傾向が見られたが、1997年にはその関係が逆転し、自己能力感の高い生徒ほど、高い学歴を求めずに学習時間も短い傾向が見受けられる[2]。おそらく、自己能力を生得的属性とみなす傾向が強まった結果、後付け

（1）荷宮和子『若者はなぜ怒らなくなったのか――団塊と団塊ジュニアの溝』中央公論新社、2003年。
（2）苅谷剛彦『階層化日本と教育危機――不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂、2001年。

の社会的属性で補強する必要などないと考えるようになったのであろう。

近年の若者たちは社会性に欠け、視野が狭いとよく批判される。しかし、このような観点から眺めると、彼らは外部世界をたんに喪失しているわけではないと推測される。外部世界に言及された途端に、内部世界の諸要素はたちまち相対化されてしまう。それは、自己評価において生得的属性にウエイトを置き、そこに「自分らしさ」の根源を見出そうとする人びとにとって、不安定要素が自らの世界に呼び込まれることを意味する。生まれもった素質に規定された予定調和の世界を少しでも安定させたい人びとにとって、きわめて都合の悪い事態である。

したがって、現代の若者たちが脱社会的なメンタリティを示すのは、社会という大海を知らない井の中の蛙だからではない。そうではなくて、逆に、社会という大海の不確実性を身に染みて感じている絶対主義者だからである。今日の若者たちは、極小の世界へと感性の窓を閉じてしまうことで、自らの視線の絶対性を確保しようとしている。内部世界の安定を確保するために、外部世界をあえて積極的に排除しようとしているのである。

このように考えると、昨今の若者たちが「自分らしさ」に強いこだわりを見せ、生まれもったはずの適性や個性に見合う仕事でなければ働く意味がないと考えて、あるいはそれが見つかるまでは職に就くことなどできないと考えて、最初から極度に身構えてしまうのも納得がいく。とりあえず何かをやってみるうちに、自分の適性や好みも次第に分かってくるかもしれない。あるいは、それもまた次第に変わっていくかもしれない。そういった発想は、ここからは生まれにくいからである。だから、社会へと出ていく敷居もかえって高く感じられるようになっているのではなかろうか。

2――ルサンチマンを見失った若者たち

（1）現状肯定的なダウナー系の人びと

2005年に電通総合研究所が行なった調査によると、現在の日本では、自分の生活程度を「中の下」や「下」と考える人びとが大幅に増えている。同時に、その「生活に満足」と感じる人びとも過去最高の多さとなっている。同年に内閣府が行なった国民生活選好度調査でも、格差を是正すべきだと考える人びとは減少している。

一方、読売新聞が2003年に発表した「全国青少年アンケート調査」では、じつに75%の若者が「努力しても成功するとは限らない」と回答している。先に触れた高校生新聞の調査でも、40%の高校生が「競争の結果、格差が広がるのはしかたない」と回答し、30%の高校生が「努力しても報われない」と回答している。

このような状況を受けて、斎藤環は、「学習や修練によって自分が変わるという期待すら存在しない。まるで『自信がないこと』にかけては誰よりも自信があ

るとでもいうような、『確固たる自信のなさ』とでも言うべき態度」が、若者たちに蔓延しつつあると指摘している[3]。

昨今の若者たちが現在の自分を絶対視してしまいがちなのは、それが生得的な資質にもとづいた自身の姿だと感じているからであろう。あらかじめ設定された定数たる自身のキャラだと感じているからであろう。だから、いまの自分の姿はそのまま将来も同じにちがいないという確固たる信念が芽生えてくるのではなかろうか。

努力次第では自分も勝ち組になれるかもしれないと少しでも思えるときには、そうではない現在の自分に対して、人は苛立ちや焦りを覚えるものである。そして、すでに成功している人びとにその感情が向けられたとき、そこにはルサンチマン（鬱積した怨恨・嫉妬）が発生することになる。しかし、エリートの世界は自分とは全く無縁なものだと、端から感じているとすればどうだろうか。

しかも、その違いは、封建的な身分のように理不尽な生得的属性にもとづくのではなく、生まれもった素質という一見「合理的」な生得的属性に由来すると考えられている。自分がどう足掻いてみたところで、現実はけっして変わらないものなら、むしろ分をわきまえ、その生まれもった素質にあわせて「自分らしく」生きたほうが、よほど楽しい生活を送ることができると思えてくるのではなかろうか。

もっとも、封建的な身分制度を理不尽だと考えるのは、私たちが近代人だからである。当の封建時代を生きた農民たちにとってみれば、それは自明視された現実であった。だから彼らは、生活苦から一揆を起こすことはあっても、武士にルサンチマンをいだくことはなかった。自分も武士になれるなどとは夢にも思わなかったからである。近代以降、エリート層に対して大衆が強いルサンチマンをいだくようになったのは、本来的に人間は自由で平等なはずだと気づいたからである。しかし、その近代的なベクトルがいま逆流しはじめているとしたらどうだろうか。ルサンチマンが弱まっているとしても、けっして不思議ではなかろう。

勝ち組の人生が自分のそれとは何の接点も持たないものだとしたら、彼らの生活ぶりを外部から眺めることは、あたかも映画や演劇を鑑賞するようなものとなる。そして、どうせスペクタクルを見物するのであれば、勝ち組に感情移入したほうが楽しみも倍増するというものであろう。近年の国政選挙で、いわゆる「下流」に位置する若者たちが、自らを苦況に追い込みかねないはずの「小泉劇場」に魅了され、セレブ候補者たちにエールを送るという奇妙な現象が見られたのも、じつはそのためではなかろうか。

（3）斎藤環『「負けた」教の信者たち――ニート・ひきこもり社会論』中央公論新社、2005年。

（2）現状肯定的なアッパー系の人びと

もちろん、「下流」に位置する若者たちの皆がみな、将来もずっと「下流」のままでよいと思っているわけではなかろう。「自分もいつかは勝ち組の生活を手に入れる！」と意気込んでいる若者も、なかには少なからずいるはずである。

しかし、そのようなアッパー系の若者もまた、端から上昇意欲を持たないダウナー系と同様に、すでに勝ち組にいる人びとに対して意外なほどルサンチマンを抱いていないように見受けられる。これまでの解釈からすれば、これは奇妙な現象である。

そこで、アッパー系の若者たちが語る将来像によく耳を傾けてみると、じつは驚くほどお互いに似通ったものであることに気づかされる。そのほとんどが、自分もＩＴ企業を起こして成功し、その後に株式を上場するか会社を売却して大金を手に入れるといった類のものばかりなのである。このワンパターンさは、いったいどこから来るのだろうか。

先ほども触れた苅谷の調査によると、90年代以降の学校では、「何をやっても無駄だ」という生徒と、「頑張れば必ず成功する」という生徒の間で、いわば意欲の二極化が進んでいる。インセンティブ・デバイドと呼ばれるほど極端なこの二極化の傾向は、じつは「生来的属性によって人生は決まっている」という感覚を、そのどちらもが同じ根として持っていることを物語っているのではなかろうか。

人生はあらかじめ定まった運命であり、自分の努力で変わるものではない。そう確信するからこそ、極端な無力感が生まれる一方で、極端な全能感も生まれる。素質がないから頑張ろうとするのではなく、素質があると思うからこそ頑張れるのであろう。今はまだ発見されていないだけで、自分の内部にもきっとダイヤの原石が潜んでいるはずだ、そう思い込んでいる人たちは、いま現実には何の拠り所がなくても、いわば「根拠なき自信」を抱くことができるのである。

アッパー系の若者たちの抱く将来像がきわめて似通っているのも、それが自らを取り巻く具体的な諸状況に根差したイメージではないからであろう。現実の自分の身の回りに横たわっている諸条件とは無関係な、「根拠なき自信」によって支えられた夢であるために、マスメディア等で流通する成功モデルに安直に飛びつき、画一的な将来像を抱いてしまうのではなかろうか。

一方、ヒルズ族のようにすでに勝ち組の地位を手に入れてしまった人びとは、当然ながらルサンチマンを抱くことがない。まだ実現してはいないが、将来は自分も勝ち組の一人だと固く信じうる者は、すでに同様のメンタリティを、予期的な社会化によって所有しているのであろう。だから、彼らもまたルサンチマンを抱かないのだと考えられる。

「確固たる自信のなさ」を抱く若者たちも、「根拠なき自信の強さ」を抱く若者たちも、じつは同じメンタリティの持ち主である。どちらも生得的な素質によっ

て自分の人生は定まっていると感じ、したがって人生の行く末を見通してしまっていると感じている。だから、表向きは正反対の志向を示しているように見えながら、どちらも格差の拡大を容認してしまうし、エリート層に対してルサンチマンを抱くこともないのである。

3――コミュニケーション能力の一元化

（1）ヘゲモニーを握るエコノミー原則

では、昨今の若者たちの人生観が、以上のように両極端な色彩を帯びるようになってきたのは何故だろうか。ここで留意すべきなのは、極端化する彼らの心性の変化が、近年のグローバル化する経済構造のなかで、新自由主義の台頭によってもたらされた、いわば虚偽意識にほかならないという点である。その結果として、自己評価の物差しが、きわめて一元的なものへと単純化されていく傾向が見受けられると考えられるからである。

たとえば、教育における近年の大きなテーマの一つは、コミュニケーション力や人間力の涵養である。しかし、これらの概念は、将来の職業生活を保障するという観点から、換言すれば、経済活動の競争力を高めるという観点から、若者たちの能力をいかに育んでいくべきかという文脈で使用されることが圧倒的に多くなっている。「経済的であること」と「人間的であること」が、いわば対立概念として使用されていた往年の教育文化とは大きな様変わりである。

今日の日本社会では、エコノミーの原則が文化全般のヘゲモニーを握り、対人関係さえもその尺度で測られるようになっている。そこでは、他者との人間関係をうまく築くことのできる能力がつねに問われる。それも、腹を割って話しあい、お互いの人間性を高めていけるような対人関係を築く能力ではなく、ビジネス上の交渉事を円滑に進め、場面の空気を敏感に読み取って迅速に対処できるような対人関係の能力である。

ちなみに、書店にならぶビジネス関連の雑誌をざっと眺めても、上司や部下といかにうまく付き合うか、会議や交渉をいかに円滑に進めるか、といった類の対人関係のテクニックをめぐる特集が、とくに近年は目白押しである。生産技術をいかに高めるか、品質管理をいかに徹底するか、といったメーカー本来のトピックも、また人間関係の問題へと置き換えられて論じられる傾向にある。いまや対人関係を築く力は、経済活動を発展させていくために要請される技術へと変貌している。

このような趨勢のなかで、今日の日本では、いわば市場主義的なコミュニケーション能力の有無によって、その人間の評価も大きく左右されるようになってきている。若者たちに見受けられる近年の心性の変化も、じつはこのような社会状況をストレートに反映したものにほかならない。エコノミーの原則にしたがった

一元的な物差しのみによって各人の能力が測られる傾向が強まってきているために、自己イメージもまたそれに照らし合わせて両極端なものとなりやすいのである。

（2）対人関係の能力が偏重される時代

冷静に考えてみれば、対人関係をうまく築けない人間は、いまに始まった存在ではないはずである。往年のＴＶドラマを思い起こしてみても、たとえば向田邦子の脚本による『寺内貫太郎一家』の主人公、貫太郎は、他者とのコミュニケーションがまったく不得意な人物であった。だから、周囲の人びとと何度も軋轢を繰り返し、それが視聴者の笑いと涙を誘った。

貫太郎は、東京下町で３代続く石屋の職人であった。当時の職人の典型的イメージをそのまま具現化したような人物で、ぼくとつで頑固一徹な人物であった。石屋という職業設定も、彼の性格の頑固さの隠喩だったといえる。しかし、丹誠を凝らした作品には、彼の内面の人柄が投影されており、周囲の人びとは、その作品とともに彼の真心をも受け取った。そういう人間は、そこかしこに昔から存在していたはずである。

このように、かつては、対人関係のへたな人間は日常生活では損をしやすい立場にいたかもしれないが、それが人間としての価値を否定される要因というわけではなかった。貫太郎が、視聴者から人気の高いキャラクターであったように、彼らは、むしろ人びとからいとおしまれる存在ですらありえた。だから、対人関係が不得手なことに自己劣等感を募らせることもなく、むしろ逆に、唯我独尊のような状態におちいる危険さえあった。職人気質という言葉が示していたように、巧みな対人関係を営むテクニックなど持ち合わせていなくとも、モノを創る技量と誠意さえ持っていれば、それは自ずと相手に伝わっていくものであるし、したがって生活の糧ともなりうる。それが往年の職人の世界だったのである。

ところが、昨今は、その人物評価がほぼ完全に逆転してしまっている。対人関係の苦手な人間は、そのことによる否定的な評価を、人格の全体にわたって受けやすくなっている。だから、人間関係がうまくいかないと、「自分はダメな人間だ」と自己劣等感を強めていきやすい。また、そのことが対人関係に対してさらに悪影響を及ぼすことにもなる。いったんこの悪循環におちいってしまうと、そのスパイラルから抜け出すことはきわめて難しいのが今日の状況である。

対人関係を過度に偏重するこのような傾向は、とりわけ若い世代の人びとの間で著しい。ベネッセコーポレーションが2006年に行なった調査でも、「いい友達がいると幸せになれる」と回答した高校生は約96％に上る。逆に、友人たちと対人関係をうまく営めない人間は、周囲からの評価がきわめて低く、いじめの対象になったり、それがきっかけで不登校になったりもする。学校や職場で当たり前に生活していくためにも、対人関係のテクニックの獲得は、何を差し置いても最

優先にされるべき事柄となっている。

ふたたび物語の世界に目を転ずると、スポーツ根性物語のはしりとなった梶原一騎の原作による往年の名作マンガ『巨人の星』が、2006年８月から『週刊少年マガジン』誌上でリメイクされている。ただし、その主人公は、星飛雄馬から花形満へと入れ替わっている。貧しい境遇のなかで努力を積み重ね、親子だけで黙々と血と汗を流し、自らの技量を高めていった星飛雄馬から、そのライバルであり、中学生の分際ながら自家用車を乗り回し、多くの手下を引き連れ回っていた金持ち息子の花形満へと、主人公の座がバトンタッチされたのである。

ただし、登場人物たちのキャラクターの造形は、リメイクにともなって大きく変質している。近年の長引いた不況の下でさえ、大量のモノで溢れかえってきた現代の日本では、すでに職人気質など死語となっている。現代の読者たる若者たちがリアリティを覚えるのは、職人芸的な生き様を示した星飛雄馬の姿ではなく、むしろ人間関係に翻弄され、それを乗り越えようとする花形満の姿なのであろう。『巨人の星』における主人公の交替は、この時代の空気を正確に読み取ったものだといえる。

このように、市場主義的な対人関係のマネージメント能力が強く問われる現代において、しかしその運営能力の適性を欠いた人びとは、自ずと劣等感を強めていかざるをえない状況に置かれている。こつこつと地道に鍛練を重ねていく職人気質にも一目が置かれていた往年の時代とは異なり、コミュニケーション能力の低い人間にとって現代は非常に生きづらい世の中となっている。とりわけ若い世代においてはそうであろう。その意味で、彼らの心性の変化には、エコノミーの原則にそった一元的なコミュニケーション能力だけを偏重する現代社会の病理が投影されているのである。

４――ポスト近代化の時代を生きる為に

（１）社会的変数としての自己の発達観

では、近年の若者たちが、両極端化した生得的属性のイメージに強く引きずられ、しかもそれが生涯ずっと変化しないものと捉えやすいのは何故だろうか。たとえ現在は「輝ける存在」でないとしても、将来は違うかもしれない、自己を変革していくこともできるかもしれない、そう考えることができにくいのは何故だろうか。一元的なコミュニケーション能力の有無に、自己イメージが過度に引きずられてしまいがちなのは何故だろうか。

人間の成長や発達といった獲得的属性を優先させる進歩主義的な観念は、生存の境界を拡張しつづけてきた近代システムが産み出したコロラリー（必然的結果）の一つである。ところが、今日の日本では、その近代社会がほぼ飽和状態に達し、従来の膨張路線に終止符が打たれようとしている。したがって、これまでの人間

観も、おのずとその変化の影響を被らざるをえない。階段状に上昇・発展していくものとして社会の変化をイメージできた時代には、そのイメージが人間観にも投影され、発達的な自己像を描きやすかった。しかし、今日のように社会の変化が横にずれていく感覚でしかありえない時代には、人びとの描く自己像もまたその影響を受けたものとなっていく。

昨日よりも今日、今日よりも明日のほうが、生活レベルが格段に上昇していた時代には、人はその実感にそって発達的な自己イメージを構築しやすかった。しかし、今日のように生活の変化がたとえ急激ではあっても、それが絶えざる差異化にすぎないと感じられやすい時代には、自己のイメージもおのずと平準なものとなっていかざるをえない。人生に対して同じように不安を抱くにしても、往年のそれが、「自分だけが置いてきぼりを食うのではないか」というものであったとすれば、今日のそれは、「自分だけがこの生活から転落するのではないか」というものへと変質してきている。

さらに、近年の「構造改革」に象徴されるような経済システムの急激な変動は、もっと短期的に見ても従来の人間観を急速に変えつつある。ＩＴ業界に代表されるような変化の激しいビジネス現場で問われるのは、完成された知識の体系をどれだけ修得しているかではなく、市場の変化に応じて新たな知識をいかに修得し続けられるかである。苅谷剛彦が「学歴社会から学習資本主義社会へ」と呼ぶように、そこで重視されるのは知識そのものではなく、むしろそれを新たに学び続ける能力のほうである(4)。

獲得的属性である知識そのものは、いったん修得されてしまえば個人的な素質の差を覆い隠してくれる。しかし、それを学び続ける能力のほうに力点が移ると、学習キャリアの出発点にある生得的な差異が、むしろ逆に際立ってくる。なぜなら、学習能力だけではなく、自ら学ぶ意欲もまた、人びとが平等に持ち合わせているものではないからである。それは、ブルデューのいう文化資本として、成育する家庭環境などの影響によって階層的に偏在するものだからである。

したがって、格差化の問題は、子どもの学習意欲が親の経済状況によって妨げられないように、奨学金制度などを充実させれば解決されるといった単純なものではない。むしろ、学んだ知識ではなく、学ぶ意欲が問われ続ける学習資本主義の浸透は、学習という獲得的属性を重視する体制でありながら、しかし皮肉にも生得的属性の比重を高めているのである。

また、昨今の新自由主義的な構造改革路線のなかで、ベンチャー・ビジネスで大成功を収めてきた勝ち組の人びとは、生まれながらの素質に恵まれた人ばかりのように、一般の若者の目には映ってしまいがちである。とりわけ、ＩＴ革命の

（４）苅谷剛彦「『自ら学ぶ力』べた褒め社会の光と影」、『中央公論』3月号、中央公論新社、2006年、234－245頁。

時流にうまく乗って急成長を遂げてきたネット関連業種では、毎日の長時間労働に耐えたからといって必ずしも成功するものではなく、一瞬のひらめきが天から舞い降りたか否かで、その着想が勝敗を大きく分けたりする。そこには、ポストフォーディズムがいわば理念型に近い形で具現化されている。

さらに、投機的な株の売買で莫大な財産を築き上げた人びとに至っては、努力と結果が一致しているようには、とうてい思えない。個人的な能力の有無はもとより、ときの運・不運に左右される部分も大きいように見える。もちろん、裏では人並みならぬ努力をしているかもしれないが、外からはそれが見えづらい。

このように、後天的な努力とはあまり相関しない天性の才能やセンス、あるいは運しだいで勝ち組になれるかのように映ってしまう今日のビジネス環境は、自らの獲得的属性に対する期待値を低めていくにちがいない。使い捨ての労働力とされ、職場のなかで新たに知識を学ぶ機会に恵まれないフリーターたちの困難な状況をみれば明らかなように、最初の出発点が異なることによって、そもそも意欲自体がデフレ・スパイラルを起こしやすい構造になっている。彼らの意欲の低さは、社会構造的な側面からもたらされたものであって、あながち個人の「心の問題」であるとか、だから自己責任の問題であるなどとはいえないのである。

（2）自分らしさの隘路から脱出しよう

私は、「下流」と称される脱力系の若者の増加を、必ずしも嘆くつもりはない。野心に満ちあふれて貴重な資源を食いつぶすアグレッシブな人びとよりも、よほど地球に優しく、むしろ持続可能な社会の担い手となるのではないかと思ったりもする。収入面では「下流」かもしれないが、その心性には、夏目漱石などの小説にしばしば登場する、たとえば『それから』の代助のような高等遊民たちと似通っている側面もあろう。

しかし、現在の「勝ち組」が、その優位な立場を独占し続けるのに好都合なのも、実はこのような心性を備えた人びとの存在である。そして、その格差が世代を超えて継承されはじめると、現在は単なる虚偽意識にすぎない生得的属性のイメージも、いかんともしがたい現実の桎梏としての生得的属性へと変質してしまうことになる。私たちは、その危険性についても十分に認識しておくべきであろう。

もちろん、このように述べてきたからといって、「自分らしさ」の根拠に、生得的な側面がまったくないと言いたいわけではない。たとえば、同じ家庭環境で育ったはずの兄弟姉妹の間にも、おのずと異なってくる部分はあろう。しかし、それが具体的にどのような内実を備えているものなのかは、いくら各人が自分の内面をじっくりと覗いてみたところで、あらかじめ発見できるわけではない。

比較する他者がいなければ、自分の個性が何なのか分かるはずがなかろう。自分が世界の中心であれば、個性などという発想そのものがありえない。個性とは、他者との違いを認識することによって、初めて生まれてくるものだからである。

あるいは、こう述べてもよいかもしれない。たとえば、憧れの人の仕草をいくら上手に真似しようとしても、どうしても真似のできない部分が、自分の癖のようなものが、そこに滲み出してしまう。所詮は他人なのだから当然であろう。しかし、それこそがその人の個性なのである。その意味で、各人の個性とは、他人と交わりつつ、何かを成し遂げていくなかで、はじめて気がつくような性質のものである。

したがって、実際に何か行動を起こしてみなければ、ただじっくりと考えを練っているだけでは、「自分らしさ」の中身は分からない。他者と交わりつつ、何かをやってみる過程で、あるいは何かをやってみた後で、自分の持ち味とはこれだったのかと結果的に気づくことのほうが、現実の経験則からいっても圧倒的に多いものである。もし、現在の若者たちが、いまの自分のすがたに「生きづらさ」を感じ、自信を喪失しているようなら、生まれもった「自分らしさ」にいったいどれほどの価値があるものなのか、いまいちど再考してみるべきであろう。

そもそも、私たちの自己とは、対人関係のなかで構築されるものであるが故に、また可塑的なものでもある。だとしたら、先験的な「自分らしさ」へのこだわりを捨てたときにこそ、私たちの人生も豊かなものへと成長し、輝きはじめるのではないだろうか。逆に、自分の人生を豊かにする材料が自分の内部に見つかるなどということは、おそらくはありえないことである。

詩人、谷川俊太郎の作品は、過去から現在に至るまでつねに個性的でありながら、同時に高い普遍性をも持ち合わせている。その理由について、彼はこう述べている。「ある時期から自己表現というものを信じなくなったからです。自分を空っぽにして日本語の世界を歩き、その豊かさを取り入れたくなった。自分より日本語の総体の方が豊かだから」と(5)。いま現在、「生きづらさ」を抱えて悩んでいる若者たちには、そして、その原因を短絡的に求めようとし、流行の「自己分析」にはしりがちになっている若者たちには、ぜひこの言葉の含意を吟味してもらいたいと思う。そして、彼らの眼差しを自らの「心」へと向けるのではなく、むしろ逆に社会へと向けてもらいたいと思う。

もちろん、現在の若者たちの「生きづらさ」が、じつは彼らの「心」のあり方に起因するものなどではなく、根源的には社会体制や経済構造に由来するものである以上、自らの視座を転換したからといって、そうたやすく解消されるとは思えない。しかし、若者たちが問題の核心へと迫り、彼ら自身の明るい未来を築いていくためには、そうすることによってしか問題解決の糸口を掴めないのもまた事実であろう。その事情は、いつの時代においても同じはずである。

［どい たかよし］

（5）『朝日新聞』（夕刊）2005年12月20日。